

孤
囚
漫
筆

碧雲暗雲

此の章は筆墨未許の期間、即ち大正十四年九月二十日當秋田刑務所到着から大正十五年五月十五日に到る、約八ヶ月間に亘いた俳句と短歌とをのみ、記憶のまゝに記したものである。二三月の頃、僕の心の中にも大きな嵐が一二度吹きすぎた。従つて書き記すべき感想も多々ある譯けである。が、それ等は又、今後の感想文中に追憶の形で書くことにして、此處ではただ句と歌とのみ止め置く。

◇

大正十四年九月廿日夜、秋田刑務所着。翌日運動場に北國の秋天を仰いで、

死ぬ迄の赤い衣か彼岸晴

十一月に入り、兼ねて聞き及ぶ氷雨(霽也)降り初む。十二月中旬より雪亦盛んとなる。二月頃には四五尺積るべしと聞き、晩年の一茶が故郷の信州柏原村なる物置小屋へ辿り着いた時の、

これがまあ終の住居か雪五尺

といふ句がふと泛んだ。

御房はたゞ

雪氷雨吹き込む窓を顧み哉

眠れる蠅

壁の上にちつと動かぬ蠅一つ多をや眠る息

やとだへし

壁の上にちつと動かぬ蠅のごと我れの命も

此處に終るか

大晦日

眠る蠅除けて煤掃く男かな

大正十五年一月元旦

元旦も曇り曇りと啼く鴉
元旦も曇り曇りと啼く鴉
夕暮に淡い初日を拜みけり
水滸や冷々として骨を滴る

一多の水滸泌みる囚衣哉

大寒に入り、湯婆を與へらる

湯婆を抱いて更に愚とならむ

一碗の鹽茶待たる、氷雨かな

冬の起床

雪凍る窓の硝子のきらきらと青く光りぬ

月残るらし

雪深き窓に佇み月光の青きを吸ひぬ魚の如

くに

二月に入る。

水暗く映る眼玉を寒むみけり

窓裏積雪

ふと開けさの雪がこぼれた桶の水

休日

日の影や心疲れに足袋干しつ

三月に入る。

深く眠り得たる眼覺の深い雪

如影

老母を包む冬の光線の濁る塵

屋根の雪のとどろと落ちて揺るゝ陽や

古雪の雨夜の獨り按摩哉

浅春

梅匂ふ里ゆ戀しも蒼空の牙ゆると見れば霞

落ちくる

蒼空のいづくからともなくに落つ眞白霞は

いみじきろかも

四月に入る。急に牙え返つて寒風強く、霰、氷雨、雪、と、かなり荒れた。

爪色も先づ散ばし春の空

空へひとと顔つけて春を讃へけり

魔子が赤坊の頭を憶ひつゝ、

春の空を見て泣き止んだ大きな眼
畑打つ 囚人の空を仰ぐ顔
雪眼病む看守寂しく陽炎へり
永き日や幼時偲べの 飴太鼓

五月。秋田の櫻も漸く咲き初めたとの話。あたりに樹木のない故か、我が庭には蝶も飛ばない。青草さへ稀れた。春は只、空にのみ輝いてゐる。

壁の空気穴から、一匹の黄蜂が部屋へ飛び込んで来た。そして、肩や膝などを這ひ廻つたり、ちつと羽根を伏せて外の蒸氣の音を聞き入つたり、約一時間ほど、淋しい部屋へ春の彩を閃めかせてから歸つて行つた。

耳翼を取れよと肩の蜂が云ふ
我れ酔蜂と號すを知るやお客蜂
蜂は歸るか洞へるあの蒼空へ
蜂を送る窓の暮春の砂埃り

望月の公チャンに贈るべき、童謡が一つ出来た。

影法師

壁に映つた影法師さん
いつでも私の眞似ばかり
お手々を振れば
お手々振る
オチニと歩けば
また歩く
おちぎをすれば
おちぎする
ほんとにおかしな影法師よ
いつたいあなたは誰アれなの

今日は限覚めるか、明日は飛び出すかと、暖かくなりかけた時分から毎日の様に壁を見上げて居たが、大切の蠅は一向飛び初めない。辛棒を切らせて、トウトウ箒で掃き落して見ると……

：何んだ馬鹿々々しい、古くからの死骸ぢやないか!! 即ち、窓から春風裡へ、ハイちゃい。

南無や 蠅 春風 葬となしにけり

無臭大音

昨夜「乞食桃水」讀了。三年前讀んだ時とは又別個の感があつた。

面山和尚は彼を頌つて「日本初看眞散聖。寒山拾得好雙眉」といひ、中村星湖は此の書の跋文「我觀桃水」中に「私はその類例を日本よりは西洋に、佛教徒よりは基督教徒の中に求めたくなる」といつて、トルストイやフランシスの事に言及してゐる。僕はフランシスの事は全然知らないが、しかし、桃水は寒山や拾得とはかなり異なるものがある様に思ふ。寒山などには、むしろ良寛の方がより近くはあるまいか。(尤も面山の時代にはまだ良寛はゐなかつたのだが……)「乞食の安右衛門」が「乞食の桃水」に多くの興味を覚えるのは當然だらうが、僕はやはり星湖君と共に「桃水の志は乞食そのものにはなかつたらしく推量する。」そして僕はその「出家の出家」をしたといふ點と「信施を受けるよりも労働」を遇んだといふ點とに、桃水の人となりを見出す。労働と宗教との不二」を主張する百姓の江渡秋嶺君も「桃水の出家の出家を思ふ毎に、私はいつでも六祖慧能の十五年間の獵師生活を想ひ、又、最初の禪家の生活規則を定めた百丈の、一日不食といふ言葉を心に浮べる……云々」といつてゐる。

しかし又、僕は別に斯う思ふ。桃水のあの「労働」も「乞食の群に投じた」ことも、すべて「忍苦」といふ事が主であつたのではあるまいか。星湖君のいふやうな意味の「不勞所得の罪惡感」は勿論あつたに違ひないが、しかし其の心よりも「忍苦の修業」といふ事が、桃水の、あの労働生活と乞食生活とを生み出したのではあるまいか。即ち、樹下石上の出世間の苦行から、人間社會のどん底生活の苦行へ移つたといふことが、その根本であつたのではあるまいか。そして「不勞所得の罪惡感」は、その裏に潜在意識として働いてゐたと見る方が、あの時代の思想から考へて、より穩當ではあるまいか。

僕は昨春、市ヶ谷刑務所で相馬御風著「大愚良寛」を讀んだ時には、春風に觸るゝの思ひをしたが、この「乞食桃水」では、尊敬の念に伴つて、一種の重苦るしさを感ぜられた。これは桃水の、忍苦的色彩の強さから來る感じだと僕は思ふ。

著者安右衛門君は「桃水に後ること百五十年、北越に同じ曹洞宗の奇僧大愚良寛があつた。彼が國上山の五合庵に悠々と詩歌に半生を托したのと、憐れな乞食の群や苦惱者のうちに半生を奉仕した桃水とは、その間雲泥の差がある……云々」と言つてゐる。が、しかし僕は、あの良寛が國上山近傍の町の商人、百姓、村童の中に交つて、その磊落飄逸な行ひや、春風蕩々た

る談笑裡に多くの人々を感化した事實を思ふ時、詩歌にのみ悠々と遊んでゐたとは言はれまいかと思ふ。桃水は、その「大慈悲心」に於て「忍苦の修業」に於て、遙かに良寛に優れてゐたであらうが、僕一個の感じの上から言ふならば、僕はとも、桃水よりは良寛の方が親しみがあつて好きである。

(五・一六)

畑の遠近に多少の青草が伸び、白い三味線草の花が四つ五つ咲いてゐる。これが今年になつて初めて見る「花」だ。貧弱だが、デモ流石に花は花だ。何處からか蝶が一つ飛んで来て居る。地を低く、黄蜂、地蜂なども忙しく飛び初めた。

(五・一九)

楠正成が参禅したといふ話は、歴史家の多くは後世附會の説としてゐる様である。が、禪家の方では、一劍倚天寒の喝に因つてかなり有名である。

『楠公何某禪師に問ふて曰く、生死交受時如何。師言下に喝して曰く、截斷兩頭、一劍倚天寒。楠公聞いて滿身流汗す。師、正成の體を見て曰く、汝大いに徹せり……』

といふやうに二三の書で讀んだ事を記憶してゐる。ところが、いま坪野平太郎著『叱牛録』を見ると、

『昔、楠公が湊川で戦死せられたその前夜に、俊明極といふ名僧の庵を叩いて、生死の境は如何なるものであるかと聞いたら、「何の事もない、ヒヤーツとする位のものだ」と事もなげに答へたところが、楠公は滿身に汗ビツショリかゝれたと云ふ。その體を見た禪師「汝大いに徹せり」と言はれた。楠公は深くその垂訓に感激し、其の翌日は思ふ存分に戦つて遂に弟正季と綱刺して死んだ』

と、ある。どちらの種本が正しいのか知らないが、讀んだ上での感じから云へば、どうも後者の方が面白い。「一劍倚天寒」の名句よりも「ヒヤーツとする位のものだ」との一言、遙かに身魂に徹するやうに思ふ。この事もなげなる一言こそ、まさしく楠公をして流汗沛然たらしめたらうと合點ける。

(五・二〇)

雑誌『人』来る。井泉水君の俳話「自然を聴く」が第一に眼にとまる。

僕がまだ俳句を唯一の楽しみとしてゐた頃、たま／＼來阪した井泉水君を迎へて、堂島のさる俱樂部で歓迎俳句會を開き、「障子の句に就いて」と題する眞摯な季節論を聞いたのは、今から數へて三十四年も昔の事になつて了つた。井泉水君の俳話は、あの頃の自分の姿をも思ひ出されて何んとも懐かし。

井泉水君は丁度「層雲」を發刊し初めて、今日の句境の第一歩を踏み出さうとする時であつた。丸顔で、づぼら髯が少々伸び、鐵ぶちの眼鏡の中から澄み切つた眼の光つてゐた面影がい

まだに記憶にある。確か飛白の着物に飛白の羽織で、黒い兵児帯を締めてゐた様に思ふ。

「愛妻を亡へる井泉水氏東本願寺に入る」といふ新聞記事を見たのは、一昨年、僕が福田大將を附け狙つてゐた頃だつた。そして昨年八月、市ヶ谷で初めて此の『人』を購讀したとき「井泉水氏西國巡禮に旅立つ」といふ記事を其處に見出した。更らに本年三月ここで濱田教師から『人』の綴ぢたのを借讀すると、本年一月號に「孤影新春」と題して、同君の旅行吟が載つてゐた。僕はその中の、

孤り旅の元日の浪の音雀の聲

といふ句を透して、大正の芭蕉然たる井泉水君の巡禮姿をしみじみと頭に描き、心に味つたのであつた。

孤り旅の元日の浪の音雀の聲

清くすき透つた感じのする、強い淋しみのある句だ。ア、僕が四國の南岸を死神と共に漂浪ひ歩いたのは……さうだ、確か廿一歳の夏だつたと思ふから、十三年ほど以前（すると、井泉水君と會つたのは十五六年も前になるかも知れぬ）になる。僕のあの時の旅——旅と云ひ得るならば——は、まるで、足腰の立たない癩病患者が泥濘の中をのたくり廻つてゐたやうな旅であつた。……さうだ、炎天の泥濘の臭ひが鼻につき、蕩濁りの波の上を千鳥が飛んでゐた。海近い畑の中には、日車の花が爛れたやうに咲いてゐた……

(五・二二)

『叱牛録』に曰く、

「不動心を得るには、不用意の用意、工夫外の工夫がいる。糞度胸の如きは眞の不動心ではない。」

うむ……ギャフン!!「我有大力量、風吹即倒」

『エライ變つた社會主義者やさうな——』

夕方、窓の外を歸つて行く一群の囚人の中から、斯うさ／＼と聲が聞えた。

昨年十一月、或る風の吹く夕方にも、やはり同じ一群の人達が、

『社會主義者が來るとお菜がよくなるつて言ふけど、一向に駄目ぢやないか』

などと言ひながら窓の下を通つた。が、その時には、たゞ苦笑をさせられたに過ぎなかつた。しかし今日の『エライ變つた社會主義者やさうな——』といふ言葉を聞いた時には、冷めたい、死人臭い、實に氣味の悪い手の平ですう／＼と顔を逆か撫でしられた如くに感じ、ブル／＼と體の慄えるのを覺えると同時に、水漬のやうな味氣ない汗がポト／＼と腹の底へ沁み込んだ。影法師「ヘッヘッヘッ、それや一體何んの涙だい、大將。今夜はあんまり「無臭大音」でもなささうだぜ!!」ヘッ、ヘッ、ヘッ、……」

(五・二九)

◇ 『總べてに負くるは總てに勝つ事なり』といふ、奇妙な、しかし確かに一つの眞理である事を最初に悟つた人間は、負け嫌ひな人間といふ動物中の、最も負け嫌ひな奴だつたに相違ない。

杜鵑

◇ 永平寺管長北野玄峰老師の來所を仰ぎ、一席の特別教誨ありたり。八十五歳の老軀、流石に歩行の衰へは見受けしかど、壇に上られてよりの意氣、その音吐、實に獅々僧が面目躍如たるものありき。

禪の說法、初めて聴聞す。言句の咄々として迫り來る氣鋒、直指、佛地に躍入らしむるの慨、我が豫てよりの想像に違はず、嬉しくありたり。

大塗杖もて床を鳴らしつ壇に進む紫衣の老衲が霜威、黃衣を纏へる一侍僧が地蔵然たる溫顔、墨染を着せる二人の供奉僧の羅漢然たる面魂、いづれか古畫中の人物ならざる。

短夜や師の一咳に弟子醒む

六花の句も思ひ出でられ、いと興深く眺めき。

(六・一七)

◇ 房の際、砂利敷ける邊りの草は殆んどむしり去られたれど、いまだ何んの苗をも植えぬ畑には、時得顔の青草まばらに生えたり。

「すゝめのろうそく」の青く立ち並べる、「かや草」の穂の風になびける、「三味線草」の花の白く名残りを見せたる、これさへ今は捨て難く覺ゆ。されど、此處には近く茄子植ゆると聞えければ、草々の運命長くもあらざるべし。去年の秋、風に送られてたまたま獄屋が畑に落ちたる草種の、久しき冬を土に忍びつ、春の芽、梅雨の穂と、辛くも伸び得し今日の命なれど、明日にも忽ち抜き捨てらるれば、死して其のまゝ畑の肥しとなる。もの皆なの「いのち」の輪廻、哀れ極く、情趣深し。

(六・二二)

◇ 布團は今日より夏らしくなり、蠅も、いささか汚れたれど白麻を下附さる。市ヶ谷刑務所の、窓わくに古蚊帳の切つ端しを張れるが如きものにはあらず、一人前の蠅なり。

蠅吊れば觸るゝ編笠水の桶

蠅好きの怪談好きの男哉

畑の胡瓜苗に注ぐ爲め、窓下の下水溜りを汲み初めしより、蚊は著しく殖えたり。先づは、めでたさは今年の蚊にも喰はれけり

と、一茶爺が句にても口ずさみ、苦笑せんか。

(六・二九)

◇ 僕は幼時から、家庭に於て、學校に於て、常に「二二が四」といふ生き方を教へられて來た。が、社會の荒浪の中へ孤舟を鷗ぎ出すや否や、人間には「二二が八」といふ面白い生き方のある事を知つた。

ところが、最近禪の本をボツ／＼讀む様になつてから、人間には、更らに「二二が零」といふ奇抜な生き方もある事を知るに至つた。

二二がゼロ!

(七・四)

◇ 監房の附根の所に生えてゐた、かたばみ草の花は、先月廿日頃、きれいにむしり取られて了つたのだが、此頃また新しい葉を伸ばして、黄色い花が其處此處の砂利の中から炎天を覗いてゐる。早いものだ。

生の力!!

砂利の中に咲くかたばみの花親し

寐語閑語

◇ 休み日。

今日、團扇を下附された。どうも馬鹿に暑いと思つたら、日午は九十度近くある由。夏中の最高は九十六七度まで界るといふから、どうかすると東京より暑いかも知れない。それに四方が厚壁なんだからな。ひや／＼と壁をふまへて晝寝かな」といふ調子には勿論ゆかないしさ。

——え? 「横着を言ふな」でかい。はつ、はつ、はつ。

(七・一八)

◇ 寐語閑語綴るや蠅に笑はれつ
空を飛ぶ夢さめてけり手に團扇

病臥

蠅の聲呆け眼に聴き入りぬ

痴縁かや毛垢を落とせば甜むる蠅

蝶の卵子化して青蟲となり、畑の玉菜ほとんど蠶食され了る。花心を蝶ちて子孫を遺さしむるの蝶は、即ち又、綠葉を食み盡すの蟲。もの皆なの両面、陰影、あくまで皮肉也。あくまで深刻也。

惨たる玉菜より眼を轉じ、遠く雲の峰を眺めて下腹に氣を籠むれば、蟬の叫び、遙かの方より心耳へ流れ来る。

蟲 閑かに菜を食み盡し雲の峰
蜂 暑し雀は落す屋根の土 (七・二五)

梅雨中は殆んど照り續けた加減か、土用も半ばにならうとする今日此頃になつて、梅雨染みた雨がよく降る。今年の冬の小作争議は、更に深刻な場面を見せるだらうと想像される。

雨の暗闇を運動に出ると、遠くの胡瓜畑には白い蝶が群れ飛び、古井戸の井桁に鹽辛蜻蛉がとまつてゐた。夕べ雨に交つて、久し振りに蛙らしい聲を聞いたと思つたら、摒ぎわの、苔づいた小石の上に、一疋の小さな青蛙がちよこなんとして坐つてゐた。

仙人然とした藁や、池にぼつかりと泛んで青空をにらんでゐる駁様蛙なども面白いが、この雨を呼ぶ青蛙といふ奴も中々捨て難い趣きがある。一茶の、

落の葉に飛んでびつくり蛙哉
薄べりに尿して逃げる蛙哉

なども、此の青蛙趣味である。

あの、古井戸や、池や、小流などに、誰れやらの句にあつた、

泛ぶ様は他力本願の蛙哉
と云つた恰好で、ぽかんと泛いてゐる駁様蛙に煙管のヤニを食べさせると、直ぐ、はらわたを吐き出して、水で綺麗に洗濯して了ふと聴いてゐる。

人間のほらわたも、この蛙のやうに自由に吐き出して洗濯の出来るやうだと、嫌やな胃腸病などの心配のないのは勿論のこと、謂ゆる「腹の中のきれいな」人間ばかりで、さぞすがすがしい淡白な社會が出現してゐることであらうにと、少々羨やまし。 (八・三)

朝顔

◇
七月の課程が不終了だったので、必定この十五日には筆墨を引揚げらるゝことと思ひ、十日すぎから總べてその準備をして筆紙に觸るゝことを止めてゐたが、十五日になつても一向に引揚げがない。係部長に訊ねると、教務から引揚げに来るだらうとの話である。丁度十六日に教

務主任が見えたから其の旨を話すと、『不終了！それはいけないナ、わしの方で調べて置く』と云はれたが、今日に至るも未だ何等の沙汰がない。忙しいので手が廻らぬのかも知れぬと思ひ、また或は温情的にトボケて放つて置いてくれるのかナ、とも考へて見る。どちらか知らないが、兎に角いまだに引き揚げはない。この二三日、机上の筆墨を眺めながら小首を捻つてゐたが、とうとう今日からまた書き始めることにした。 (八・一八)

◇
今朝、蚊帳をたゝむとして、青蛙に觸れて驚く。

新涼が飛込むで来た且哉 (八・一八)

◇
久し振りの快晴である。澄み切つた朝空の遠くから、潺湲として秋が流れて来る。

◇
今朝の秋

鳩は高く秋氣の流れのぼるらし
今朝の秋眞如薰ずる景色哉 (八・二〇)

◇
そろ／＼七夕様かなと思つて聞いてみると、はや今日はお盆の十四日とのこと。チイ／＼蟬や露蟲の啼くのも無理はない。

◇
雲の下を行く薄雲や秋の蟬

午後になると、西南に面した唯一の窓から太陽の光が部屋の中へ訪づれてくれる。最初、豆粒ほどの一點の輝きが床板の上に落ちる。と、それが見る／＼うちに横へ延び、丁度窓巾の長さの輝いた棒となる。更らに其の棒は、だん／＼と太つて行つて終に窓形の日影となり、其の影が次第に東側の入口の扉へと推し進んで行く。日影が入口の扉に達してしまふと、こんどは漸々に南側の壁へと移つて行き、再び西へ西へと南の壁面を傳つて、高く小さく消えて行つてしまふ。僕は、此の日影の歩み行く姿や、光線の色合の微妙な變化を樂し眺め、或は氣候の變化と日影の歩道の推移する關係などを興味深く觀測しながら、其の日／＼を消して居る。さる人の獄中作にも、

◇
くろがねの窓にさし入る冬の日の
移るを守り今日も暮しぬ

といふのがあつたと記憶するが、日々の時の歩みの一刻々々を、囚人はど深く味ふものは他にあるまい。囚人は、ある意味からは『生ける屍』と云つていい。が、斯うした生を味ふ深刻さから言へば、囚人は却つて『全的に生きる者』と言ひ得るだらう。
豆粒ほどの最初の日影が、丁度紙の上に落ちた油滴の如くに擴つて行くのをちつと眺めて居

る時、光線に彩られた埃の中の極めて微細な一つ一つが、突然、つつつと走り出すことがある。オヤツと思つて眼を近づけて熟視すると、皆なそれ／＼の立派な昆蟲である。幼蟲か成蟲かは知らないが、概して白色なのが多く、茶色や薄鼠色なども多い方である。そして、其の種類も亦、随分多様である。たゞ閑々寂々として居る我が獨房の裡も、仔細に觀察すると實は存外に賑やかなのだと知ると、うら淋しい心地の底から温い微笑の波がゆらいで来る。

(八・一一)

仇 花の秋を暑うす 胡瓜 哉
白 襦せし蚊帳より起ちぬ 秋の風

奇々怪々なる高山旅行をなす。山湖の洞窟に泊して洪水に遇ひ、アツプ、アツプの最中に夢破れたる。……逆所に立ち出でて窓下に佇めば、流月濛々として煙霧疾し。

月 濛々 水に溺るゝ 夢 醒めて

今日は九月一日である。……穏やかな夕雲である。

人の問はゞ秋の黄雲を指さゝむ (九・一)

『人』八十二號来る。

記事によれば、本月の廿三日から三日の間、信州柏原で一茶の百年祭が盛大に舉行され、當日全國から出席する名士三百名、且つ長野市の公園に一茶の句碑が建ち、信州教育會では五ヶ年繼續の豫定で一茶叢書を刊行すると。

一茶爺が深く研究されるのは嬉しい。また句碑もよからう、叢書も結構だ。が、謂ゆる名士などと稱する手合に、變に持ち上げられたりするのは考へものだ。あの爺さんばかりは、俳聖一茶などと祭り上げたたくないものだ。いつまでも、

團子 召せ 蟲も屁をこく 爺が茶屋

的な、田舎者臭い、極く平凡な、そして童心に富み、人情味の豊かな、味深い親爺として親しみたい。

良月だ。いまだ弦月ではあるが、仲秋の清空は一點の雲もなく、實に淨く冴え冴つてゐる。

一昨年の今月今夜も、かうしたい月が出てゐた。そして、三年前のこのやうな月明の夜、大杉夫妻は東京憲兵隊で虐殺された。可愛かつた宗坊は、こんな月を無心に眺めて居るところ

を締め殺された。その上、三つの屍は、赤裸にされて庭の古井戸の中へ投げ込まれた。……こんなに清浄な、平和な、美しい月光の下で!!

蟲啼くや此處な庭にも 古井戸の (九・一六)

清 宵

夕方から夜にかけて、珍らしくも神鳴さまが狂ひまわる。いゝ氣持だ。凄愴な稲光に打たれ、ビリビリと筋肉に慄えるほど雷鳴を聴くと、頭の中が實にすがすがする。

夏、故郷の明石邊で聴く、クワラ、クワラッ!! パリ、パリ、パリ、とくる奴に比べたら遙かに物足りない音ではあるが、それでも、秋田へ來てから雷らしい雷を聞いたのは、今夜が初めてだ。 (一〇・一)

結構な秋晴れだ。白い蝶が、また玉菜を訪づれる。晩秋の赤蜻蛉がふえた。雜草に交つて、紅い蓼の花が七八本咲いた。數き砂利の邊りには、今なほかたばみ草が黄金色の可愛らしい花をつけてゐる。

雲の影がさすと、玉菜の中で青蛙が鳴く。何處やらで、こほろぎも低く歌つてゐる。雀が五六羽、ばた／＼と風だて、飛びすぎた。白い羽毛が淋しく空に散る。

(一〇・一〇)

いろんな思ひ出の中で、最も懐かしう楽しいのは、幼なかつた頃の無邪氣な遊びである。今日は一日中、仕事の手を働かせながら小供の時分のことなど夢の様に思ひ浮べて懐かしんだ。

故郷の明石に、お城をとりまく古びた外濠がある。蓮の花が散り、葉も枯れては、眞黒になつた實がポトン! ポトン! と寂しく水の中へ飛び込む頃になると、それまで蓮の葉に隠れてゐた水面がすつかり現はれて、蘆むらに集つてゐるかゝつゝ、(鳩が水にもぐつたり、水面を這り走つたりするのが見え初める。と、子供達は岸の芝草に並んで、

かゝ、かゝ、つむり

かゝつむり

頭のでつべに火がついた。

と唱ひはやす。灰色の鳩の頭のところにちよつぱり眞紅な毛がある。それを「火がついた」とはやすのである。はやし立てられると、鳩は、恰もその頭の火を消さうとでもするかのやう

に、水の中へずんぶり／＼と潜る。泛び出ると、また子供達が唱ひはやす……………。
こんな、幼ない思ひに耽つてゐた間に、次のやうな童話が出来た。

かみつむり

かみ、かみ、つむり
かみつむり
頭のでつべに火がついた、
たいへん、たいへん、
水もぐれ。

出てこい、出てこい、
かみつむり

消えたか消えぬか見てやらう、
ぼつかり、そこらへ
浮いて出る。

出てきた、出て来た

かみつむり

まだまだ消えぬぞ頭の火、

もひとつ、ずんぶり

水もぐれ。

し
ぐ
れ

（一〇・一二）

昨日今日、めつきり寒くなつて了つた。三日前には赤蜻蛉や蓼の花に晩秋を愛でたのに、今朝の時雨が、午後には早や北國名物の氷雨とかはつた。

窓一羽暗れては鳴きつ時雨けり
しぐれにし土を伝ひ踏む草履哉
蓼の花いかなる戀にしぐれしぞ

（一〇・一三）

今朝、珍らしく虹を見た。色は四つしかハッキリと見えなかつたが、随分彩濃くて綺麗だつ

た。約十五分間ほど現はれてゐた。大正十三年の五月に、相州小田原の北原白秋の家の二階から城ヶ島の方面の上空に見た虹も美しかつた。

朝虹を鴉が啼いて神の旅

今日から、いよ／＼「機織」を始める事になつた。久留米がすりである。機の取りつけや何んかに二日かゝり、さて教はり始めたが、中々むづかしい。全然初めてのところへ、足が痛んでよく踏めないで滑稽なほど下手糞だ。まア其の内に馴れて来るだらう——馴れば、趣味のある仕事だから靴下の先ががらんかと違つて面白味も出てくるだらう。

中村より手紙来る。文中に、

『公子は、日曜にはマコネエちゃんと會つて仲よく遊んでゐます……』
とある。おゝマコ！ マコ！ いよ／＼上京して来たな。嬉しい、嬉しい。これで氣に懸つてゐた事が一つ片附いた。誰れがマコを世話してやつてくれるのかは知らぬが、何分よろしくお願ひ申す。

（一一・一二）

冬日影

「自然に學ぶ」といふ人よりも、「自然と語る」といふ人の方が僕には親しみを感ずる。

「自然を拜む」といふ人よりも、「自然を愛する」といふ人の方が僕には嬉しい感ぜられる。

子供は自然と語ることが好むが、自然から理論を引出したり道義を學んだりすることは知らぬ。子供は自然を愛するが、自然を拜むといふやうな氣持は知らぬ。

人間苦に徹した成人の宗教的な敬虔な心持と、極く無邪氣な純真そのもののやうな子供の心と、どちらがより尊く、より價値多いものなのか、僕には判断が及ばない。（一一・一六）

『旅人芭蕉』を再讀。

『或日、芭蕉は窓に肘をかけて、物を思ふでもなく、輝かしい春のいきづきに耳を傾けてゐた。庭の池は荒るゝまゝになつてゐた。それは、魚の鱗として用ひた頃は、手入れも届いてゐたであらうが、大火からは全く棄て、顧みられず、藻が浮いたり、蛙が棲んだりするの任せきつてあつた。彼は此の毎日見慣れてゐる溜池に、格別の風趣がある譯ではないが、あるが』

儘に物寂びた感じには飽きぬものがあると思つた。凡て人が作つたものは如何に佳く出来ても、堅苦しい意力や智力が露出してゐるやうで面白くないものだが、其物が廢れて人手から離れて「時」といふものゝ手に渡されてしまふと、「時」はすつかりそれを美化してしまふ。それは人の手に磨かれてゐた物質が、自然の儘に歸る所から来るのかも知れぬ。人間の短い生命を越えて流れてゐる、悠久な時間といふものの、厳しさに觸れる爲めかも知れぬ。兎も角、庭先に荒るゝまゝに棄てられてゐる古い溜池の、物寂びた水面を見つめてゐると、恐ろしく幽邃な感じに誘はれる、心がじと澄み切つて、そこに誰も立ってない水面そのものの、様に、意識が止靜の境に凝つてしまつたやうである。其時、澄み切つた心の鏡の閃めいて動く一つの生命があつた。止靜した水面に音を立て、一匹の蛙が飛込んだのだつた。大地の中から目覺めて來た春の魂が、此の輕快な生き物となつて、死のやうな靜寂を蘇らせたのであつた。悠久の相に浸りきつてゐた芭蕉の心は、忽ち刹那の象に引戻された。而して、其刹那の相を通じて、再び悠久の眞實をしつかりと感得する事が出来た。蛙とび込む水の音」と、其時芭蕉の口に出たのは此の短章であつた。——蛙とび込む水の音——此音を彼は、彼の心を以つてしつかりと聞いた。此の音を通して彼は、宇宙に脈動する生命の寂しさを聞いたのである。此のとき口に上つた短章を補足して、彼の一句を得た。

古池や 蛙とび込む水の音

實によく書いてある。「自分の孤獨な心を以つて、大きな自然の愛を感じ、生きようとする」芭蕉の心境が、眞に如實に描かれてゐる。

私は、實をいふと、この「古池」の句をあまり好かなかつた。それは、此の句は神祕拔ひされて、「この句には、常人輩の視ふ事の出来な幽玄な旨が含まれてゐるので、我々の兎や角と批評がましい事を云ふべきものでない。……」といふ風な、玄妙不可思議な影が附されてゐるので、先づ嫌ひだつた。そして、「何んだ、平凡ならぬ句ぢやないか」と呟いてゐた。いや、此の句が、こんな風な氣持から嫌ひだつたのは、子規の「古池の句の解」といふ、古い宗匠達の月並泉をやつつけた、あの一文に大いに感心し共鳴したからであつた。そして子規の、「ある種の本によると、この句の來歴が斯ういふ風に書かれてある。——一日、禪僧、佛頂和尚が芭蕉を訪づれて、如何は生前一句と問答をかけた。すると芭蕉は、言下に「蛙飛込む水の音」と、眼前の物を捉え來つて答へた。佛頂は、あつと感嘆して芭蕉を禮拜した。其の場に居合して、師の尊さを今更らに知つた門弟共は、後で「蛙飛込む水の音」といふ句に上の文字を冠せて載いて我等の守と致したいと、師の翁にお願ひした。すると、芭蕉は笑ひながら「先づお前達なら、此の上五を何んと置か、試みに附けて見よ」と言つた。嵐雪が先づ「寂しさに」と置いた。續いて杉風が「宵闇や」と置いた。其角は「山吹や」と置いた。芭蕉はそれ等を眺

めて「なか／＼皆な趣きありて面白し、されど我は、たゞ事實をこのまゝ、古池や、と置くべし」と言はれたので、皆々更にあつとばかりに感嘆した。——我々は、こんな出鱈目を信ずるものではないが、いま假りにこれを事實として見るならば、私は「古池や」よりも、其角の「山吹や」の方が更に句に動きがあつて好いと思ふのである。」

といふ意味の文章を嬉しく讀み「全くだ、山吹や、の方がずつといふ」と思つてゐた。しかし、神祕談は兎に角として、芭蕉にとつては「古池や」でなければならぬのであつた。芭蕉の俳句は趣味を弄ぶ俳句ではない。自然のふところに浸つて、何等の技巧をも用ひず、ほつと思つて様な氣持で吐き出さるゝ言葉……それが彼の俳句である。……井泉水は實によく芭蕉を生かしてゐる。

藝術の爲めの藝術を愛し、美的陶醉の裡に悠々と遊んだ華村の風格を慕ふ子規が、芭蕉の「古池や」よりも其角の「山吹や」を好いたのは、また當然であらう。芭蕉には芭蕉の藝術があり、其角には其角の藝術があるので、のだらう。東西南北、歸りなん、いざ。夜深けて等しく見る手巖の雪」か。

但し私は、其角の句は大いに於いて好きぢやない。

私も勿論芭蕉の句は好きなのだが、しかし、世に膾炙されてゐるところの、謂ゆる芭蕉の名句なるものの中には嫌ひなのが少かつた。殊に「もの言へば屏裏し秋の風」だの「やがて死ぬけしは見えず蟬の聲」だの「道のべの木樞は馬に喰はれけり」だのといふ句は、大嫌ひだつた。それは「屏裏し」の句が妄語の戒めに「やがて死ぬ」の句が無常迅速のお説教に、「木樞は馬に」の句が放縱のいましめに用ひられてゐるやうに、それ等の句のもつ理窟つぽさや、道德的の臭みが、私には鼻持ちならず感じられるからである。

ところで、井泉水君は「旅人芭蕉」の中で「木樞は馬に」の句を、次の如く味つてゐる。『岡部から藤枝と、單調な倦き易い路ではあるが、芭蕉は馬を揺らせながら、あたりの景色に眼を放さなかつた。馬は雨の中に耳を垂れて、何か考へてゐるやうな、淋しい足どりを歩いてゐた。』

驛はづれの所であつた。千里が少しおくれたので、芭蕉は馬をとめてゐた。そこらは片側に疎かな小家と木立とがあつて、家には木樞の生垣がめぐらしてあつた。平生は往還の埃を受けてゐる其の葉も、雨の爲めに緑が美しく清められてゐた。薄紫をした其の花も、露を含んで凋れ勝ちに可憐の風情であつた。と、彼の乗つてゐた馬は、鼻面を木樞の方へ伸べて、手前へ出てゐる枝の一つを啣へるや、ぐいと引寄せ、そして其の緑の色をバリバリと噛むのであつた。芭蕉は其時うつとりした氣持で、自分を忘れて、其の木樞と馬とを見つめてゐたのだつたが、此時自分に歸つたやうに感ずると同時に、安らかに息を吐くやうに一つの句がはつと口に出た。

道のべの木槿は馬に喰はれけり

彼は斯う作つたものゝ、自分ながら餘りに無造作であることに驚いた。道端の木槿が馬に喰はれたといふこと、それは旅の途中などでは、何處にでも見られるやうな、ありふれた平凡な事ではないかとも疑はれた。けれども、彼は又、此句はこれでいい、ありふれた事、そのありのまゝの姿が尊いのだ。平凡とも見える程に自然なものとこそ眞實なのだと考えた。そして今自分で自分達は句を思ふ上にも、何處か一つの巧みを求めてゐた。又は其處に一つの手柄を出さうとしてゐた。それが淺かつたのだ。自然を自然のまゝに見る事の味ひ、此の味ひこそ、まことの俳諧の目ざす所ではあるまいか、と思ひ當ると、彼は此の一つの句を以て、今までの殻を打ち破つて、實に廣々とした地に踏み出した様に感じた。

彼はまた思った。木槿は木槿として自分の生を茂して居る、馬は馬として自分の本能を生かしてゐる。偶々、馬が木槿を喰ふといふ事によつて、木槿の生の一部が馬の生の一部分に移つて行く、その事が實に自然に行はれる、木槿はそれで平氣である、馬もまた虚心である。大きな自然には一分の増すところもなく、又一部の減するところもない、これでよい、これでよい、と。そして彼は、餘りにも無雜作に出来たやうなこの一句を以て、在來にない安らかな境地を探り當てた喜びを感じたのであつた。

私はこの文章を読んで、今まで大嫌ひだつた此の句が、こんどは大好きな句になつてしまつた。古池の句よりも、この句の方が好きだと感ずるようになった。そして嘗て島崎藤村が『芭蕉の句は、その句一句だけを抜き出して、例へば或る句集の、ある季題の下に並べられた句の中に見出したのでは、その眞實味が味はれ難い。私は、芭蕉の句は、彼の紀行文の中に於て味つてこそ、本當の味ひが味ひ得られるのだと信じてゐる』と言つた言葉が、今に於て成程となつてゐるのである。

私は、俗悪な宗匠どもの言葉に、餘り囚はれすぎてゐたのであつた。それ等の汚れた言葉を洗ひ落して、たゞありのまゝ、このまゝに、この木槿の句を深く味へばよいのであつた。

本來は極く自然な、素直な句であるにもかゝらず、從來の俗悪な解釋や、道學者の理窟づめの臭味によつて汚されてゐる俳句は、他の人のにも澤山あるやうだ。良寛の、

焚くほどは風のもてくる落葉かな

といふ有名な句も確かにその一つである。この句は、華美や、贅澤を戒むるお説教屋の常用句となつてゐる爲めに、悟りを銜ふ、キザな惡臭が附加されて了つてゐる。だから、私もこの句は嫌ひな句だつた。

が、一昨年市ヶ谷の獄に於て、相馬御風氏の『大愚良寛』を読み、此の句が吐かれた五合庵の脱俗な生活と、良寛の大愚振り——その人格——を識るに及んで、良寛には自分の悟りを銜

つたり、垂談の句を作つたりするやうなところは、藥にしたくもなかつた人である事を知つた。そして、此の落葉の句が、五合庵の生活そのまゝを、極く自然に、ほつと一句に吐いたものである事を知つて、此の句も亦嫌ひぢやなくなつて了つたのであつた。

若し此の句が、雪中庵墨太などといふ俗宗匠の句だつたらどうだらう。きつと、ベツ、ベツ、と唾を吐きたいやうな句に感ずるに違ひない。——斯う考へると、藝術も要するに人格だ。

芭蕉の門下で、その飄逸な風趣と、素直な童心味との句を以つて私を喜ばせてくれる人に、惟然坊がある。井泉水君は、芭蕉をして、惟然坊の句を次の如く言はしめてゐる。

『芭蕉が大垣に滞在してゐる時、美濃關の人、惟然が訪ねて來た。惟然是富んだ家に生れたが、財を守ることに全く心を用ふることの出来ぬ性來から、窮窶な自分の家を捨て、自由な自然に遊び、己が好む所に漂泊してゐた。彼は感興が湧くがまゝに十七字を連ねたが、俳句を作らうといふ風に考へた事はなく、推敲商量などと肩の凝ることはせず、たゞ口から吐き出すがまゝが句になつたり、又獨り言に落ちたりした。しかし、彼は芭蕉の名を聞き、風雅の上では敬すべき人である事を知つて、逢ひたくなつて來たのであつた。芭蕉は彼に日頃の吟の二三を書かしめた。』

水鳥やむかふの岸へつういつうい

しぐれけり走り入りけり晴れにけり
などが其風であつた。芭蕉は、此の句の眞情はよい、無分別なところも面白い、けれども、俳諧の姿は斯うした一面ばかりではない。即興をそのまゝ詠む心の外に、じつと自然を見つめる心も亦なければならぬ、軽くではない、強く把握する力も亦なければならぬ、といふ事を話した。惟然は首を垂れて聞いてゐたが、どうぞ今後は門下の一人に加へて長く教を受けたいと云つた。

天然の大きさを以て自己の心境を磨き上げた獨自な宗教家的傾向をそなへてゐた芭蕉——、自然の佗びしさを掘つて掘つて掘りぬいて、遂にあの寂しく清く澄みきつた詩の水脈を掘り當てた芭蕉——、その芭蕉が惟然の句を見て「眞情もよい、無分別な所も面白い、が、即興をそのまゝ詠ぶ心の外に、ちつと自然を見つめる心も亦なければならぬ、軽くではなく、強く把握する力も亦なければならぬ」と、優しく穩やかに惟然を教へるところ、俳聖芭蕉の面影は確かに斯ういふ風であつたらうと、うなづける。

惟然の句は、全部で四五句しか知らないから、芭蕉の弟子となつてからの彼の句がどういふ風に變つて行つたのか、私には分らない。けれども、芭蕉の終焉記たる『花屋日記』に、看護の門弟達が次の間で一枚の布圍を引つ張り合つて寝た時の即興を、惟然が、

引き合ふて布圍に寝き笑ひ哉

と詠んだので、病苦の芭蕉翁も思はず笑ひを漏らされた。などあるから、其後もやはり飄逸な惟然だつたに相違ない。しかし、此の「布園の句」と「水鳥の句」とを較べて見ると、彼れ獨特の持ち味の上に、更に芭蕉の感化による「さび」「わび」といつたやうな深味が加つて來てゐる事を見逃す譯には行かない。

まあ、それは兎に角として——私は、あの惟然の句、

水鳥や向ふの岸へつういつうい

を一句見たゞけでも、惟然といふ人がむしうに懐かしく思へてならないのである。水鳥の句は輕きにすぎるかも知れない、淺いかも知れない。けれども、芭蕉が没するや否や、互ひに正風の本家争ひをして歪み合つたり、お大名の暫間と變つてしまつたりした他の多くの門弟共には、とうてい斯る無心な無我な句は吐けまいと私は思ふ。

繰り返して言ふ、惟然の水鳥の句は、輕きに失したのかも知れない。淺いかも知らない。しかし何んといふ無我無心な、小供々々した、あどけない句であることよ!! 大人になつてもこんな小供々々した句が吐けるほどに童心の豊かな人——私にはこんな人が懐かしく慕はしくて堪らない。

(三・一二)

久太獨白『此處は名に負ふ陸奥の、秋田の獄に春立ちて、空うらかに輝けど、彼岸をすぎて消えやらぬ、冬の執心、殘んの雪、そのしふとさに引替へて、これはあんまり氣の早え、チクタク背を蚤一疋、人生萬事走馬燈の、廻るが如しと聞くなれど、雪と蚤とのかけ合ひは、秋田ならざア、よもあるめえ、初花姫の口説なら、紅葉があるのに雪がふる、……………』

窓の雀『これ申し久太郎さま、雪が消えぬに蚤が整す、さぞチュツ、チュ、チュ、チュ、チュ、ちゅらう、ござんちゅら、チュン。』

(大向の聲、イヨウ……御兩人!! 御兩人!!)

殘る雪尻目に蚤をとり得たり (三・二七)

今年になつてから初めて庭の土を踏む。空は暖かさうに青く潤つてゐるが、赤い煉瓦塀の蔭には汚れた雪が残つて居り、頬に觸る、風もうすら寒い。しかし、雪の解けた畑から青く芽がふいてゐる。草の色にも春は充分に覗はれる。

穴を出た我は地蟲よ庭の春

霞むなら

今日は神武天皇祭。一日、二日、三日と、實にいい天氣だ。惠まれたるお天氣だ。夕べも、一昨夜も、大空で生玉子を刺つたやうな春月は見なかつたけれども、紫に輝く匂やかな星の光を飽く事なく寢床から眺めた。

加茂眞淵が歌に「うらうらとのどけき春の心より咲き出でける山櫻花」といふのがある。東京邊りでは、櫻の花はもうふつくらと紅い蕾がふくらむでゐると思ふ。望月の家でも、庭の春草が青く萌え出で、楓の芽葉が美しいだらう。そして今日は、親父が自製の竹籬を飾つて、一ヶ月おくれの雛祭でもしてゐるだらう。白酒に酔ふて小さき吐息かな」公つべいが可愛い事だらう。

春になつてから、鶏の聲が毎日聞える、雀の囀り聲も冬の聲とは全つきり變つて了つて、歡喜そのもののやうだ。あのうつとりと和やかに、暖かく、うらうらと溶けて流るゝやうな美しい春の色が、やがて空中にただよひ満ちるだらう。もすこし庭の草が萌えたら、黄色な蝶が飛び始めるだらう。南國から燕がやつて來て、朗らかな春の歌を聞かせてくれるだらう。

春、春、楽しい四月——。

(四・三)

七日の午後だつた。教務主任が來て「中村しげから、古田大次郎の「死の懺悔」とお前の「獄窓から」とを送つて來たのぢやが「死の懺悔」はどうも見せられないから直ぐ送り返すことにする。「獄窓から」は、まあいゝから、後ほど下げてあげる」と言はれた。

胸をといろかせて待つてゐると、夕方、領置係の人が持つて來てくれた。眞紅な絹装束の綺麗な本だ。型も新型の三五で三百九十頁ある。先づ表紙を開くと、望月が描いてくれた私の顔が現はれた。おや、俺はこんな嫌な面らつきなのかなア、頓馬な面らつきであることは残念ながら承知してゐるけれども、この畫の顔は随分野卑な面らだ」と苦笑しながら次ぎをめくる。「獄窓から」と書いた我輩のメイ筆が、セビヤの極く濃い色の上へ黒で現はされてゐる。石版だ。これは大いに氣に入つた。次ぎは「蠅よ跳れ……」の御自筆の句だ。「ハツハツハツ、いづれも立派な字、立派な字、雅氣愛すべきものか」と悦に入つた。

寢に就いてから、むさばるやうに本文を読み耽つた。……感慨無量だ!! 「其夜の歌」と「あやめさん宛の手紙」を読んで、また涙を落した。讀み終つた時、炊夫の人達が出て行つた。八日は、夜眠らなかつた割で頭が重かつた。が、やつぱり時間の暇を見ては「獄窓から」を繰り返し／＼拾ひ讀みしつゝ、追憶に耽つた。

今日もまだ追憶の夢心地だ。止めうよと思ひながら、いつしか本を手にしてゐる。おつと考へ耽つてゐる。

(四・九)

しげ女から差入れてよこした『子規全集』第十一卷の「俳家全集」中に、私の好きな惟然の

全集を見出した。美濃の人、廣瀬氏、梅花鳥落人惟然とある。梅花鳥落人……變な名をつけたものだ。惟然とはほど風變りな男だつたらしく、『近世畸人傳』とかいふ本の中にも、内藤丈草と共に其の奇行が傳へられてあるといふ事だが、一度読んで見たいものだ。

寶永七年五月二十七日歿——とあるから、師の翁芭蕉の死後、まだ長らく生きてゐたものとみえる。丈草の死んだのは寶永元年とあるから、丈草よりも後に歿した譯だ。彼の壽齡は明らないが、かなり老人になつてから死んだものと思はれる。

これで彼の句の全部なのかどうかは知らないが、ここに予規は惟然の句を百句餘り集めてある。水鳥や向ふの岸へつういつうい——だの「風呂敷へ落ちよつゝまむ夕雲雀」だのといふ彼れ獨特の句の外に、落着いた、深みのある句もかなり見受けられる。

行く春や寝覺きたなき宵の雲
臘八やけさ難炊の蕉の味
ゆつたりと寝たる在所や冬の梅
風や刈田のあとの鐵氣水
など、實にいふと思ふ。これ等は皆な、芭蕉を師と仰ぐようになった以後の作品に違ひあるまい。

が、私にはやはり惟然調の、無我な、流麗な心情から自然のまゝに詠み出でた、無造作な句の方が、より好ましい。

松島や月あれ星も鳥もとぶ
馬の尾に陽炎散るや晝多葉粉
かるの子や首さし出して浮藻草
なんか、惟然らしくていふぢやないか。

丈草庵を出づる時

鴛に又來て寐ばや寐たい程
翁に坂の下にて別るゝとて
別るゝや柿喰ひながら山の上

奥州のある寺に入りて

木もわらむ宿かせ雪の静かさよ
こんな句を讀むと、飄々として旅から旅を渡り歩いてゐた彼の心境が、如實に味ははれるぢやないか。

奈良の萬僧供養に詣で片ほとりに一夜を明しけるに、明けて主につかばすき料足もなけ

れば、枕もとのから紙に名處ともに書捨ての
がれ出侍りけり。

短夜や木質もなさでこそはしり

なんて、泊り逃げ、食ひ逃げもやつたらしい。しかし彼は、こんな乞食に等しい漂泊の旅をなしつゝあつたものゝ、彼も亦浮世の苦勞人、人の親であつたやうだ。

わざ／＼逢ひにとて來りし娘に示す

重たさの雪はらへどもはらへども

娘にあふて

兩袖にたゞ何となうしぐれ説

はらはうとしても、はらはうとしても、どうしても、うちはらひ、振り切つてしまふ事の出來ない恩愛のきづな——。こゝに人間の「憂さ」が、そしてまた「尊さ」があるのであるまいか。

若葉ふくさくら／＼と雨ながら

水さつと鳥はふは／＼ふりはふは

この句境は、何人にも追隨をゆるさない、全く彼れ獨特の無心境である。沒我境である。童心境である。

句調の上では、同じく私の好きな「俳諧寺一茶」が惟然と非常によく似たものをもつてゐる。

けれども、一茶の朴訥、直情、滑稽の中には「おらが、おらが」の匂ひが、即ち一茶の自我がかなり強くにじみ出でゐる所がある。それは惟然のやうな全くの沒我でない。一茶の味は、朴訥、滑稽であるが、惟然は寧ろ「あどけなさ」の味ひが多い。しかし惟然の句も、

梅の花赤いは赤いは赤いは赤いはな

だとか、

於知足亭

涼まうか星崎とやらさてどこぢや

などになると、井泉水の言葉の如く、どうも「獨り言」に墮してしまつてゐるやうだ。かうなつてもまた恐れ入る。

私が、いま、とある池のほとりか、或は極くゆるやかな流れの小川の岸かを歩みつゝあると假定する。梅雨も終り頃の薄曇つた空あひから漏れてくる、すがすがしい朝の日ざしを浴びて、岸近い水面に流れ寄つてゐる萍には、白い、みづみづしい花が微風に吹かれつゝ涼しく咲いてゐる。で、私は靜かに其處へ足をとめて、その白い花や、藻の匂ひを、しばらく懐かしさうに打ち眺めた。すると其の時、足元の草むらから一足のちつぽけな殿様蛙が水中へ飛び込んだ

と思ふと、すぐ、ひよつくりと、萍の花の陰から飄然な顔を覗かせた。そして、私は、その風情が妙に入つたので、それを句に作つて見ようと思つた……と假定する。

藻の花の陰から覗く蛙かな

私はたぶん斯んな風に作るに違ひない。が、童心味の豊かな惟然は、

かるの子や首さし出して浮藻草

と詠んでゐる。ちよいと見ると、どちらだつて大した相違もなさうに思へる。句のまとまりは、前句の方がきちんとついてゐるやうである。が、幾度も繰返して二つの句を読み較べてゐる中には、後句からは、こんな平凡な句であるに拘らず、前句では味ひ得ないところの、妙に捨て難いもの——童心から受ける一種の喜び——を感じずにはゐられぬ。

何故だらうか？ それは、前句はたゞ淡い興味から生れた即興句に過ぎないけれども、後句には、無我な惟然の心と蛙の心との、親しい、笑み合ひが句の中に生きてゐるからである。『かるの子や……』と惟然はほゝ笑みながら浮藻草から覗いてゐる蛙を飄然に呼びかけた。母親に背負はれてゐる赤ん坊を隣家の婆さんが『お、お、可愛坊やだことわいの、おんぶして貰つて、さうかいの、さうかいの……』と嬉しそうにあやかす時のやうに、『お、可愛らしい、かるの子や……』と惟然は呼びかけて、そして『首さし出して、さうかいな、そこの綺麗な浮藻草から……』と惟然の心がほゝ笑みつゝ、この句が出来たのであらうと私には感ぜられる。

『かるの子』だの『浮藻草』だのといふ古雅な言葉を使ふと、きつと嫌やなキザな句になつてしまふが、惟然のこの句からは少しもさうした臭味を感じない。

私は、斯ういふ風な句の味ひを得る度に、無我で、恬淡で、しかも温かい潤ひと、童心の明るさとを兼ね有する純情詩人の尊さを讃嘆せずには居られない。(四・二二)

◇

お晝の食事を済ませて例の如く生水を一杯あはつてゐると、窓の近くに當つて「チロロロ」「チロロロ」とさみしく啼く小鳥の聲が聞えた。『おや、又あの啼き聲だ！』と思つて窓から外を覗くと、丁度窓の前どころの、やゝ空高くに張られた電線に、見馴れぬ小鳥が一羽向ふむきにとまつて、暖かな春の光を浴みてゐる。『お、この鳥なのだ、先達つてから私を淋しがらせてくれたのは——』と思つたとたんに、また「チロロロ……チロロロ」と、静かな低い聲で、向ふむきのまゝ啼いた。

『お、この鳥だ！』と私は叫んだ。

大きな雀と變らないが、尾が非常に短く、體に丸味をもつてゐるので、雀よりも少し小さく見える。肌の毛は全體に白く、羽は極くすんだ青と茶との雜り色らしい。顔のところが色は、はつきり見えないが、嘴はやゝ赤味を帯びてゐるやうである。足も赤くつて可愛い。やはり雀屬の小鳥ではないかと思はれるが、何んといふ鳥なのか一向に知らない。私は、その名の知れ

るまで、かりに「ちろろ鳥」と呼ぶ事にしよう。

春風の寂しさ問はむちろろ鳥

◇

お茶の時、こんどは「ちろろ鳥」でも雀でもない、甲ン高な聲の囀りが聞えて來た。おや？と思つて窓から見廻したけれども、その姿は少しも見えない。が、力の籠つた高調子の聲は、どこかで盛んに轉つてゐる。

それから夕飯が済んで、暮れかゝる連日の西空がうつすら霞んで見える頃、また高調子な囀り聲が聞えて來た。覗いて見ると、窓のところが電線に、雀の二三倍ほど大きなある綺麗な鳥が、長い尾をピン／＼と上下に振りながら、高い聲で歌つてゐる。

甲ン高な響き渡る聲の調子と、長い尾をピン／＼と振り動かすところは、河原なぞでよく見受ける鵲にそっくりである。嘴の細くてやゝ長いところなどもよく似てゐる。が、羽根の色は夕暮でよく分らないが、黒ではなくトビ色のやうであつた。形も河原に見受ける鵲よりはやゝ大きい。それに、河原の鵲はこんな所へやつて來て、電線の上で囀つたりなんかしないだらうと思ふ。或は「山鵲」とか呼ばれる鳥ではあるまいか。

ちろろ鳥。山鵲？ けふは何んだか不思議な嬉しい日である。(四・二五)

◇

けふは「ちろろ鳥」が夫婦づれでやつて來た。賑やかなしい旭を浴みながら、私の窓の方を向いて、電線の上に仲よく居並んで轉つた。昨日は胸毛のあたりは白色だと思つたのだが、今朝見ると、翼を除く全體のむく毛は「うぐひす茶」の極く薄い色であつた。そして、首のところは濃い「うぐひす茶」と「とき色」との綺麗なまざり色であつた。赤い嘴の格好は「文鳥」を思はせるものがあるが、色は「文鳥」のよりは遙かに劣る、薄桃色であつた。

昨日見たのは、どうも雌鳥だつたらしく、雄鳥と見受けられる、初見參の方は、體がほつそりとして形がよく、尾も雌鳥よりは少々長い。彼等は、ちろろ、ちろろと啼き交しながら、互ひに頭の邊や顔のやわ毛を嘴で清め合つてゐる。乙な濡れ場を見せつけられた譯である。

ちろろ鳥けさは番ひで來りけりうつくし夫
を見せむと思ひて

春の朝の光り靜かにみだしつゝちろろちろ

ろと押るゝ對鳥

鳩雀鶯やくだかけちろろ鳥我が幽窓のにぎ

春ぞこれ

◇

いろ／＼の鳥、盛んに渡り來る。

今朝見し鳥——。

大きな、色合、ほとんど「ちよろ鳥」に等しけれども、「ちよろ鳥」の如き首の邊りの濃紅の毛色はなく、尾は黒白のまだらなり。且つ嘴の白きこと象牙の如くに美し。啼き聲は雀に似て美音ならず、チツヒュー、チツヒューと尻をや、長く引いて啼けり。

運動場にて見し鳥——。

形、雀よりはやゝ大きく、尾は長くして黒し。羽根に黒き毛あり、また喉から頤にかけてちよつぱり黒色あれども、他は全部純白なり。顔は胸に比して小さく、頭にやゝ長き毛の見ゆれど、「冠」と呼ぶほどにはなし。全體の形よし。啼聲は甲ン高く澄みて抑揚あり、すこぶる美音なり。

暖かや小鳥に翼をかけられて

(四・二八)

教誨日。濱田さんが支那の現時局の重大なる形勢に就いて、詳細に且つ解剖的に話して下さつた。中々面白い。

英國の殖民地に對する權力失墜の話には……既に十九世紀末に於て此の事を論斷したタロポトキンの名著『田園、工場、及び戰場』の正しさを今更らながら感嘆した。

次の世界的大戦争は支那を舞臺とすべし……とは、歐洲大戰の直後、炯眼なる各國の經濟學者が叫んだところであつた。

ロシアの支那に對する野心……これは早く六年前に日本の一共產黨員に對して故レニンが打明けた東洋赤化運動の第二策である。と思つては、笑んで聴いた。

張一派の爲したロシア大使館の襲撃……張をしてこれを斷行せしめた力は——ハツ、ハツ、ハツ。

南方共產派と蔣介石派との分裂……これは勿論ロシア側の豫定であつたらうが、恐らくロシアの心算よりは早きに過ぎたらう。そして、これを早めさせた力は、日本の暗中飛躍の奏功に相違あるまい。

上海に於ける陳獨秀の銃殺……フシ——これは何んと云つても共產黨の大打撃だらう。ポーランドの醫者君やゴズロフ君、健在なりや、だ。

殺し、殺され、奪ひ、奪はれ、か!!……悲惨なものだなア、資本主義の斷末魔的狂亂の姿は——。

◇

(四・二九)

運動に出る麗らかな春日である。昨日は初めて地我蜂を見、今日はまた白き蝶と木の葉蝶の飛ぶを見受けた。まばらに生えた雜草にも、小さな花や柔かい穂先が現はれて來た。だのに……燕がまだやつて來ない——。

蝶々やしばし歩めば手に艶のやよ雀つばめは來ぬか何故おそい陽炎や靜かに据せばまとふなる
まア此のちいさな春草は！
ちいさな草の小花も蝶に訪はれ顔

魚の泪

しげ女面會に來る、嬉しかりし。

持參なして差入れられし本「良寛和尚詩歌集」「一茶と良寛と芭蕉」「萬葉全集」「萬葉以後」及び芥川龍之介君の拙著「獄窓から」を評せし日々新聞の切抜。

奥山先生より、ねむごろなる御傳言と共に金十圓也を給はる。且つ、是非一度秋田へ面會に行きたしとまで仰せられしとか。御慈愛の深さ、たまげるばかりなり。

◇

昨日の午後から今朝にかけて梅雨のやうな雨が降つたが、けふは晝から綺麗に晴れた。キリギリスの啼き聲に似た小鳥の聲が頻りに聞える。

運動に出る。未だ何ものをも植えられない畑の土が、昨日の雨に濡れて、黒く、むくむくと匂やかである。そこに生えた雜草が、時を得顔に伸び青むである。眼をあげると、塀外の毘沙門さまの木立はすつかり芽がはぐれて、若葉がサラ／＼と日に映じて戦いてゐる。その背後にたち並んでゐる白雲の形も、夏の近づいた事を知らせてゐる。東側の運動場を覗くと、監房の際へ先月あたり植えられた蘭薔が、瘦せてきて細々とした葉のない枝ながら、眞紅な花をボツボツと三つばかり咲かせてゐる。

白い蝶が二つ、畑の上を飛んでゐる。今年の春は、私の好きな黄色の蝶を終に見なかつた。
雲よ躍れつゝちは枯れで花三つ

◇

病みふしのつれづれに、『良寛和尚詩歌集』を讀んでみると、次のやうなうれしい長歌に讀み當つた。

白髪

かけまくもあやにたふとく、言はまくもかしこかも、ひさかたのあまの尊の、み頭に白髪生ふる、あしたには臣をめさしめ、白がねの毛ぬきをもちて、その髪をぬかしたまひて、白がねの函にひめおき、天つたふ日つぎのみこに、傳ふれば日嗣のみこも、櫻の木はいやつぎつ

ぎに、かくしつゝいつたへますと聞くがともしも。

白かみはおほやけものぞかしこしや

人のかしらによくと言はなくに

世にみつるたからといへど白かみに

あにおよばめや干々のひとつも

これはたぶん『古事記』かなんかに記載されてある事柄だらうと思ふが、そのいみじくも古りにしならはせが、良寛といふ人格を透して歌ひ出されて、一層趣味ある事に思ひなされるではないか。

「ほぞのを」などといふ、むさいものを我々のかたみに遺すより、白銀の白髪を遺す事の方がどれほど趣味多い事かも知れぬと思ふ。が、現代人のやうに散髪してゐては、極く短い毛しかないから一寸困る。それぢややはり趣味が薄い。どうしてもやはりやゝ長くなければ面白くない。眞白な色の、軽さも軽くなよ／＼とした髪でなければ「世にみつるたから」といへど白かみにあにおよばめやちのひとつも」といふ尊い感じが起らない。また、いくら長く伸ばしても、私のやうな若白髪ぢや駄目である。若白髪も同じく白い髪ではあるが、それはまだこわ／＼としてゐて重みもあり脂氣も抜け切つてゐない。それでは、やはり尊さが少ない。老いて老いて脂つ氣も、重みも、光も、すつかり無くなつてしまつた奴にかざる。が……禿げ頭は一寸困るなア……あこひげでも伸ばすか、呵々。

(五・一九)

ふゝ、嫌やな聲が聞えてくれねばいゝにと思ふ言葉が聞えて来る。監房の中へまで聞えて来る。

『薬、薬とるさい奴だな。病氣だか何んだか知れやしないやうな恰好してゐるくせに——』
『全くですよ、ねえ、癪當さん、また夕食を残したでせう。あれはきつとまた明日寝る心算なんです。』
『チエツ！』

(五行抹殺され不明)

——まさか、わざと聞えよがしに喋る譯けでもあるまいに、ハッキリと聞えて来る。あゝ、こんな小さな忍び聲すら聞き漏らさないほど、私の耳は鋭く尖つてゐるのだ。心は尖つてゐるのだ。

抑へよう抑へようとしても、こんな聲が聞える時、怒りに燃えた血は、はげしく胸の邊りへ込み上げて来る。

『怒るな、氣を大きく持て。下らない人間の云ふ言葉なんか蚊が鳴いてゐるんだと思へ。そんな事を一々氣に懸けてゐては體がもたないぞ！』と、こみ上げてくる怒氣を叱りつける……い

つの間にか涙が沁むて來てゐる……。

『俺は馬鹿だなア』と思ふ。

(五・二四)

◇

教務主任より、過日しげ女の齋らせし芥川龍之介君の『獄窓から』評を讀み聞かせて貰つた。ただ好感を以つての紹介であつて、批評といふほどのものではない。君もやはり『歌は俳句よりも遙かに落ちる』と云つてゐる。さうかなア。歌だつて、三つ四つ位いはちよいといひのがある筈なんだがなア……呵々。芥川君も『鬼瓦』とか號して、一時は僕等と同じく『日本人派』の一句黨だつたと江口渙君から聞いてゐるが、僕の『鐵窓三昧』の中から、

のどの中へ藥塗るなり雪の峯

麥飯の蟲殖えにけり土用雲

などといふ主觀の強くない句をあげてゐる事を思ふと、君は多分、蕪村の句境を愛する人だらうと思ふ。

(五・二九)

自然法爾

今日からまたカスリ織りを始めた。

織糸を浸せる水や風薫る

(六・一)

◇

昨日あたりから、またそろ／＼足がむくみ出した。夕方近くになつてくると、眼がチラ／＼と動くやうで、ばたん、ばたんといふ音の音が頭の心に響き込む。そして、吐く息に慄えを覚え、心臓のあたりが苦しくなる。今日はお晝に鼻血が出て困つた。

停滞してゐた血が俄かに動き出したので、こゝ二週間には體の諸所に變な現象が起るだらう。が、この月中には、體の調子も馴れ馴れだらうと思ふ。

午後になつて體が疲れてくると、カスリの調子も亂れてくる。篋が入りすぎと思つて軽く打つと横糸が餘り、おや、しくちつたと力を入れて打つと、こんどは又、短いカスリが出来上つて了ふ。

——私が初めて大阪で新聞配達夫になり、自炊を始めた時であつた。一日、豆腐の汁を作らうとして醬油を入れ過ぎた爲めに水を注した。すると今度は水を入れ過ぎて水臭くなつて了つたので、また醬油を入れた。すると、また辛くなつて了つた。水を入れ、醬油を注して、終に汁が鍋から溢れ出してもまだ味が整はず、皆んなに大笑ひされた事があつた。

機械織りに困りながら、こんな古い事を思ひ出して苦笑した。機械織りは、姿勢が正しくないとカスリも正しく織れないやうである。姿勢が正しければ篋の

力の入れ方も配れないで打てるやうである。

嘗つて弓を引く人から、『弓は的ばかりをいくら狙つても當りはしない。一等大切なのは姿勢である。姿勢さへ正しく爲し得れば、矢はひとりで的に當るものだ』と聞いて、いやに儒教家みたいな口物を吐く奴だなとキザに思つて、心中ひそかに嘲笑した事があつた。が、近頃はさうした言葉がはつきり腹に落着くやうになつた。嬉しいことである。しかし、その姿勢がなかなか正しく整はない。

獄窓で獨り機の音を響かせてみると、やはり此の秋田縣の米女鬼山（少し違ふやうだな）下で、獨り寂しく機を織つてゐるときいた俳人安齋櫻痴子君の事が思はれる。君は若くして肺を病み咯血した時、その血の硯りを美化して櫻痴子と號するに至つたと、碧梧桐氏の『一日一信』で讀んだと思ふ。櫻痴子には、機を詠んだ澤山な好い句があつたやうに思ふが、今は少しも思ひ出せない。

（六・三）

久し振りに訪ねて下さつた濱田さんの曰く、

『きのふ、かつこ鳥が啼きましたね。』

郭公鳥!! 郭公鳥!! では、あの聲は郭公鳥であつたのか……。私は昨日きいた。又、今朝寢覺めにもきゝ、運動に出た時にもきいた。が、私は知らないものだから、鳩だと思つてゐたのである。随分高音に啼く鳩だ、山鳩は家鳩よりも遙かに高い聲で啼くときいてゐるが、或はその山鳩が近くの杜に渡つて來てゐるのかも知れない、などとも思つた。それで、けさ、

毘沙門の宮の青葉にこもり鳴く鳩かもきこ

ゆ寐覺め閑かに

と歌つたのであつた。

夕ぐれ近く、御飯を喰べてゐると又、くわつこう、くわつこう、とゆつくり三聲ほど眞上の空を鳴き渡つた。高閑な趣きのある聲である。こんどは郭公鳥だと聽いてゐたのと、眞上を鳴き渡つたのとで、全く體中を耳にして聴き惚れた。

濃淡の幾しる雲ぞ郭公鳥

白雲と青葉のあひや郭公鳥

麥飯の大塊りや郭公鳥

郭公鳥の聲には、高踏的な感じが深い。好きな聲だ。高踏的な趣きと云つても、其角の句の「日の春をさすがに鶴の歩みかな」だの「琴焼いて酒あたまむ水鶏の夜(?)」などのやうな高踏味はあまり好まない。此の、郭公鳥の鳴き聲の高踏味が好きである。少し比較が變だが……。

濱田さんはお國の能登へ歸つて居られたやうに聽いてゐたが、けふのお話では、京都で結婚

式を挙げられて、あの附近を新婚旅行されてゐたのであるらしい。

宇治川では、既に螢が飛んでゐたとか。宇治川の螢と石山の螢は、大きいのと傳説があるのと有名である。一茶の句に、

合戦や石山螢宇治螢

なんてのがあつた、まづい句だ。芭蕉の、

螢見や船頭すでに酔ふてあり

の方がいい。それよりも、

螢火や岸にしづまる夜の

水

といふ太紙の句は更にいい。私は、あまり澤山に飛び交ふ螢よりも、誰れやらの詩にあつた

『一點山螢照寂寥』といふ趣きが好きである。

宇治……若葉青葉の宇治山……新茶の匂ふ宇治の里……鮎と螢との宇治川……時鳥の鳴く宇治……平等院、橘姫、通圓茶屋、興聖寺のある宇治……少し離れて黄檗山萬松寺……いゝなア、いゝなア、いゝなア!!

私は、宇治へは前後三度ばかり行つたが、明治四十二年頃の秋、大阪から初めて行つた時の印象が一番強く頭に残つてゐる。

あの頃、京阪電鐵は既に出来てゐたかと思ふが、宇治へはまだ通じてゐなかつた。私は確か

京都から汽車で行つたやうに覺えてゐる。宇治橋の傍りで來の木人形と繪葉書を買ひ、橋の欄干の上であちこちの俳句友達に送る繪葉書を書いたのだつた。平等院の古びた池には、あやめの返り花が二つほど夢のやうに咲き、その青い葉の上には赤蜻蛉が寂寞としてとまつてゐた。

それから船で向ふ岸へ渡り、汀にある石門をくぐつて興聖寺の坂路を登つた。あたりの樹は濃き露に濡れ、路上には黄葉紅葉が散り敷いてゐた。私は手帳と鉛筆を手にしながら、その坂の途中に佇むで句案に耽つてゐると、下手から「ホウ」「ホウ」といふ懸け聲を立て、十名ほどの雲水僧が、二人づつで大盥のやうな物を荷ひながら登つて來た。墨染の衣に細のたすきを掛け

皆んな跣である。何を荷つて來たのかと思つて途をよけながら覗き込むと、それは水につけられた白豆腐であつた。折から、その豆腐盥の中へ、綺麗な柿紅葉が露とともにヒラ／＼と散り込んだ。

私は、あの豆腐買ひの雲水隊から受けた何んともいへない崇嚴な味ひは、いまだに忘れることが出来ない。

◇

閑古鳥といふのは郭公鳥のことだといふ説があるときいてゐる。が、

足跡は字にも讀まれず閑古鳥

山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり

閑古鳥といふのは郭公鳥のことだといふ説があるときいてゐる。が、

足跡は字にも讀まれず閑古鳥

山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり

閑古鳥といふのは郭公鳥のことだといふ説があるときいてゐる。が、

足跡は字にも讀まれず閑古鳥

山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり

閑古鳥といふのは郭公鳥のことだといふ説があるときいてゐる。が、

足跡は字にも讀まれず閑古鳥

山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり

閑古鳥といふのは郭公鳥のことだといふ説があるときいてゐる。が、

足跡は字にも讀まれず閑古鳥

山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり

閑古鳥といふのは郭公鳥のことだといふ説があるときいてゐる。が、

足跡は字にも讀まれず閑古鳥

山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり

などといふ蕪村の句を見ると、閑古鳥は實在する鳥ではなく、閑寂の境地からはぐくまれる心境が詩化された、一種の象徴——即ち想像上の鳥のやうである。けれども、芭蕉の、

うき我れを淋し がらせよ 閑古鳥

といふ句を讀んでの感じは、單なる想像上の鳥である閑古鳥よりも、實在する閑古鳥とみる方が却つて深く味はれるやうに思ふ。そして實際、芭蕉の此の句の閑古鳥は、郭公鳥を詠んだものではあるまいかと思はるゝのである。

と云つても、想像上の鳥としての閑古鳥を句に讀むのはいけないなどと云ふのでは毛頭ない。俳句の季題には「みづ鳴く」「鶯鳴く」といふのがあり、「養蠶」も鳴くものとして取扱はれてゐる。更に「山平化して鰻となる」「雀海に入つて蛤となる」「田鼠化して鴉となる」「廢草化して螢となる」といふやうな奇抜なものがある。和歌にだつて「時鳥の落し文」などといふ題がある。詩人は、生物學上の知識よりも「感じ」を尊ぶ。そこに詩人の跳躍性があり、神秘があるのである。

けれども、或る人は閑古鳥か實際上の鳥——即ち郭公鳥の別名として詠じ、或る人はそれを想像上の鳥として詠ずるなどといふやうな混雜は、今後避けた方がよくはないかと思ふのである。閑古鳥の文字は想像上の鳥にのみ使用し、實在上の閑古鳥は原名の郭公鳥、鳴鳩、などと書くといふ風に。

(六・五)

◆
教誨に出る。秋田藩を演壇に飾つて、未だ見た事のない私達の爲めに見せて下さつたのは有難かつた。周圍三寸餘り、丈けは四五尺と見受けた。が、濱田さんの説明によると、これは未だ完全に育ちきつてゐないので、もつと大きく、莖の直徑二寸餘、丈けは猶ほ七尺位にまで伸びるのださうである。

秋田藩の 蔭から 聞くや 郭公鳥
はどうだ、呵々。

けふの『リズムに就いて』といふ教誨中の挿話に、英語會話に巧みな某公使が倫敦で演説した時、英人は感心して聞いた後に相語つて、『日本語といふものは英語によく似たものだね』と云つたといふのであつた。

私はそれを面白く聞きながら、我がイワン・イワノヴィッチ・サルスキイ君事岩佐太郎老がなした米國シカゴでの大演説の逸話を端しなくも思ひ出した。

今から十六年以前、内地で起つた某重大事件のために、彼は、エマ・ゴールドマンやベルタマンなどの後援の下に、シカゴで獨り演説をやる事になつた。問題が問題だつたので、大會堂はぎつしり人を以て埋められた。その日、彼は三四時間に亘つて大演説をやる積りで、英文

ですつかり草稿を繕えてゐた。さて、開會となり、アメリカの同志の長い／＼紹介のあつた後、小つぽな彼は、胸をそらせて壇上に進んだ。聴衆は拍手足ぶみ歡呼して彼を迎へた。その静まるを待つて、彼は草稿を擴げながらおもむろに論じ出した。ところが、こんどは、名文句を吐くのに向拍手が來ない。すると、彼を紹介した男が突然岩佐君の傍へ進み出て、『馬鹿!! 馬鹿!! 君の英語なんか米人に通ずるものかね、會場も廣いのだ、後半分へはともそんな聲では届かない。かまはぬから日本語でやれ、どうせ内容は聴衆に分りつこないのだから、君の喋りたいだけ喋つて、足踏みし、卓を叩き、大いに興奮して熱狂して見せる、それでいいのだ。』

とさ／＼やいた。そこで俄かに彼は日本語でやり始めた。日本語でやれば、自然感情も熱してくるし、聲も腹の底から出て来る。彼は思ひきり壇を踏み鳴らして怒號した。すると、聴衆はただ譯けもなく喜んで拍手した。小さな男が何か怒鳴りながら壇上で跳ね狂ふ度びに、前半部の聴衆が拍手歡呼する。すると、それを見習つて、何も聴えない後半部の聴衆も相和して拍手歡呼する。かくて、すばらしい熱狂裡に其の演説は了つたのである。

その翌日、岩佐君が寢呆け眼で朝の新聞を見ると、驚く勿れ、四段抜き初號活字の大みだしで『日本のアナキスト岩佐太郎氏の英語大演説』と題して、しかも新聞の一頁半に互る大演説が、岩佐君の全然知らない内容の大獅子吼が、堂々と載せられてゐた。その時には、流石の落ちつき屋岩佐君も『ウム……』とうなり聲を揚げて呆れ返り、且つ大悟徹底したといふ事である。

(六・五)

◆
機へ當る日影をさへぎる爲めに、窓へすばらしく立派なカーテンを買つた。不思議なもので、これで房内の感じが非常になごやかになつた。

中央の芝草は、いま菫の花盛りである。この草は、明治二十年とかに極く僅か移植されたのださうであるが、今日では日本中の至るところに此の草が生え茂つてゐる。その菫の芝生には、紅い矢の花が咲いてゐる。近い中には燕子花も開くだらう。

日乾せし 布團に 蚤の 機嫌かな

爪なすび

◆
七八月兩月は止むを得ず筆墨に離れてゐた。それは再び「久留米がすり」を織り初めた爲め課程が不終了だからであつた。「機織り」は、六月初めから七月中頃までやつたが、やはり體の調子がだん／＼面白くなつて行くので、醫務主任に相談したところ、『君の體質には好く

ないやうだから止めたがいゝ」と云はれた。で、止めてしまつた。

八月は手刷れた「靴下かがり」に戻つたのであるが、機の影響か、月初めに四日ほど寝込んだので、また不終了。九月も筆墨を使へない。淋しくつて仕様がな。そこで所長に「科程に關係なく筆墨を許可して戴けまいか」とお願いした。その結果「九月十月だけ、科程に關係なく特別に許す」といふ事になつた。九月二日夜、二ヶ月ぶり再び雜記帳に會ひ、ガラスペンを手にする事を得た。嬉しとも嬉しである。

次の「瓜・なすび」は、この淋しかつた二ヶ月間の句と歌とである。使用紙へ針で書いて置いたのであるが、讀めない思ひ出せないのも多少ある。それ等は残念ながら皆な捨てた。

(これ等の句や歌は、「路汁」「窓の窓」の昭和二年八月九月のところに御覽願ふ。(編者))

月の心

九月に入つてから、めつきり涼しくなつた。そろ／＼蚊帳にもお別れが近づいた。

秋 蚊 を た、む や 鎖 の 微 妙 音 三 汀

といふ、清少納言でもあさうな優雅さはないが、微と鼠の小便との、いみぢき臭ひある我が白襦せ蚊帳でも、『葛紅葉宇都谷峠』座頭文彌の亡霊の出さうな「劇趣」位はあるからに、やはり『蜀の別れ』の情趣は味はれ申すて。

(九・三)

今日は舊曆八月十五夜である。去年は無月だつたので、今年こそはと思つてゐたが、此の空模様では今夜も駄目らしい。芭蕉の『名月や北國日和さだめなき』といふ句が思ひ出される。しかし、私の窓は、満月の頃の月は、明け方近くでないと拜まれなから、或はその頃までには暗れるかも知れぬ。

(九・一〇)

胃がまた少々悪い。胃散を買つて呑む。のみなから「此の味は何んとなく厭世的氣分を起させる味だ」などと變な事を考へる。曇天が窓を覆ふてゐる。腹立たしいやうな音律で青蛙が啼いてゐる。細く蟲の聲も聴える。

(九・一二)

昨夜私は變な夢を見た。私はひどい病氣になつて監房で寝てゐた。身動きも出来ない程だつた。お醫者さんが大きな大きな、びか／＼と光るメスを手にして突立ちながら私の顔をちつと見て居られた。窓の硝子を敲が叩き、雪も降り風も狂つてゐた。その窓ぎわに、ふく子さんと公ちゃんとしげやんと、桂君との顔が見えた。ふく子さんの頬には涙が流れてゐた。公ちゃん

んは指をくわえて笑つてゐた。しげ女は凄い眼をしてゐた。望月の顔は………どんなだつたか忘れてしまつた。

淋しい夢であつた。しかし、なつかしい夢であつた。變な夢であつた。しかし、しみじみと嬉しいやうな夢であつた。

あゝ、此間、野依秀一君が「囚人の苦しみは、心持は、囚人でなければ斷じて分らない」と云つたやうに、私も「久太の此の心持は、久太でなければ分らない」と獨語しつゝ、獨り掘ね、獨りたかぶつてゐたのは大きな間違ひである。獨斷である。私の苦しみが如實には他人に了解して貰へないと同じく、私は又、他人の苦しみを了解しない。しかも見よ、昨夜の夢を思へ!!望月家の人々、あなたに私の苦しみを苦しんでゐてくれるではないか。その心持は、しげ女からの手紙の文面にも、いつも溢れてゐるではないか。私の方が却つて平氣で氣樂である時にも、あの人達は私の事を思つて苦しんでゐてくれる。字が書けないから手紙を下さる事も出来ず、人にも語らぬ母の心持は、なほ更ら深くあるべき筈である。それ等の苦しみは、皆な私の爲めの苦しみである。しかもその苦しみは、私自身の苦しみより遙かに廣く、深いかも知れない。それを私は考へない。そして、獨りで掘ね、獨りでたかぶつてゐる。

人の喜ぶのを見て喜ぶ者は、また人から喜ばれる。

霧がふる。霧がふる。ころ、ころ、ころ、ろ、ろ、ろ、ろ、と窓の金網を轉つてゐる。ばら、ばら、ばら、ら、ら、ら、ら、と窓の玻璃を叩いてゐる。あれ、あの白い、白いあられの玉。

笹の葉に、震ふる音、

さらさらさら、さらさらさら、

さらさらとせる心ぞほしき。

これは良寛の歌、好きな歌。

誰れが定めたのかは知らぬが、其角、嵐雪、杉風、去來、支考、許六、丈草、野坡、越人、荷兮、の十俳家を芭門十哲と云ひならはしてゐる。支考、許六、野坡などといふ俗臭芬々たる輩を數へて惟然がない。杉風なんか、僕に言はすれば談林臭をさへ脱しきつて居なかつたと思ふ。ただ芭蕉の親味な世話人だつたといふのみだ。越人はともかくとして、荷兮などを數へる位なら、正秀、猿蓑、土芳、北枝、杜國を先きにあげねばなるまい。更に奥羽地方の大旅行に供をした、あの實直な句風の曾良は是非見逃せまい。

僕は、芭蕉の俳境には三段の轉移があつたと思ふ。第一は、杜甫、李白などの詩趣を追ふてゐる時代。第二は「細み」といふ事を唱へた時代。第三は「寂しをりに徹した時代だ。尤も、

「句の細み」「佗び」「寂び」は謂ゆる正風開眼以後に於ける正風の全姿であるから、「細み」と「佗び」とを二つの時期に分けるのはちと適當を缺くかも知れない。しかし、何んと云つても芭蕉の句は「寂び」の一道を深く深く自然の奥底にまで掘り進めたところに、その眞の輝きがあるのではあるまいか。そして、眞に「寂しき」の一道に達し得たのはやはり芭蕉の晩年に於てではあるまいか。して見れば、その意味に於て、斯く三段に分ける事も多少意味があると思ふのである。

しかし、僕がいま三段に分けたに就いては、も一つ理由があるのである。それは、芭蕉の俳境の此の三階段と、その各々を受けついでたところの門下の俳人との關係を知るに便だからである。

僕は斯う思ふ。芭蕉の第一期たる李杜趣味の深い影響を受け、そして芭蕉自らは正風への轉開と共に其の李杜趣味からも脱してつたが、師より受けついで李杜趣味を捨てずして、その妻の上へ更に正風の磨きを掛けたのが其角である。又、其角と共に李杜趣味を受けつぎ、しかも師の正風への轉化と共に李杜趣味を捨て去つて師の新らしき俳風の中から「細み」といふところに心を傾け、終にその「細み」の一道に進み徹して堂奥に達したのは風雪である。又、其、風、などとはずつと後れて入門し、師の句風が晩年に至つて益々澄みきつて行つた「寂」の一道の深い影響を受けて大成したのは丈草と惟然である、と。

惟然の句風を、芭蕉の「寂」の姿を受けついでものと見るのは、少し可笑しく思へるかも知れない。しかし、あの無我な、飄々乎とした惟然獨特の句を深く味ふとき、その底からにちみ湧いてくるものは、やはり「寂」である。

僕は、僕自身の以上の見地から、眞に芭蕉門下の何者と唱えて恥しくないのは、この四人だと思ふのである。去來、支考もまた至らざる者であると僕には思へる。謂ゆる十哲中の其他の三四は論ずるまでもない。

芭蕉の死後、其角も風雪も江戸の大宗匠と化してしまつた。が、流石に、去來や支考や許六や野坡などのやうに芭蕉の本家争ひをして、苦々しい歪み合ひは演じなかつた。しかし又、師の如く清く世を捨て、自然の天地に悠々と遊びも得なかつた。「自然に同化せよ」と教へられた師の生活の風流をそのまゝ受けついで、風雅の天地に身を捨てきつたものは、丈草と惟然である。この點から論ずれば眞に芭蕉の遺徳を傳へ得た門下の俳人は、ただ丈草と惟然あるのみと云つても好いのである。

一度び「趣味」に溺れて見た者でなければ、趣味界に遊行して趣味に溺れない妙境に到れるものでない、と云はれてゐる。さればこそ「風流には何事にも淡きがよし」と云つた芭蕉も、弟子には「深く入て浅く出よ」と句作の用意を教へてゐるのであらう。

就經の鈴が鳴る。やれやれとばかりに布團を伸べて、その中へもぐり込む。何んだか肌寒い。もぐもぐと體をもぐ。足の先きが冷たい。足首を引つ込めて着物の裾でくるむ。と、背中が丸くなつたので布團にすき間が出来てうそ寒くなる。また足を伸ばし體を伸ばしして、もぐもぐとやる。のびたり縮んだり、首をひっこめたり又もたげたり、もぐもぐとやりながら「何んの事はない蟬蟲の土もぐりだな」と思つて苦笑する。

蟬 けらのやうに布團へもぐりけり

讀んで胸の悪くなるほど嫌やなのが「茶」の句中には澤山ある。

讀んで堪らないほど嬉しくなる童心の句や無我な句が、「茶」の句中にはどつきりある。

私は「藝術の爲めの藝術」といふ態度はいけない事だと思つてゐた。しかし近頃になつてから藝術は他の何のもの、「爲め」であつてもならない。やはり藝術は「藝術の爲めの藝術」でなくてはならないのだと思ふやうになつた。貴族階級の藝術、或は遊閑藝術、或は勞働藝術、或は革命藝術、と種々の色彩の分化は起るだらう。けれども、眞の藝術の藝術たる價値は、それ等の各々の色彩に即して、然もそれ等の色彩を超越して輝き出す「あるもの」の上にあらねばならぬ。藝術は、此の「あるもの」の外の何者でもないのだ。「藝術の爲めの」といふ言葉さへ必要のない、純一の藝術境に没入した藝術こそ、眞の藝術と云ふべきであらう。

「藝術は人生の爲めに存在するものでなく、人生は藝術の爲めに存在するのだ」と云つた誰れかの言葉を面白く感ずる。藝術の極致は「人間臭」を絶した所まで行かばならぬのではあるまいか。何等の主觀の現はれないまでに、主客一如になつた境地……此處まで到らねばならぬではあるまいか。

斯く考へ來つて、僕は蕪村の客觀句の深さを思はざる、のである。

確か「旅人芭蕉」といふ本の中だつたと思ふが、井泉水君が「子規のやうに、芭蕉の句は主觀が勝つてゐるからまだいけな」といふのも見方が淺い」といふやうな事を書いてゐたと思ふ。一應は尤もな言ひ分である。けれども、だからと云つて、若しそれを逆に「芭蕉の句は主觀のだから好いのである」といふ事になると、ちと變である。まさか「古池や蛙とび込む水の音」よりも「やがて死ぬけしきは見えぬ松の蟬」や「塚も動け我が泣く聲は秋の風」などの方が、より好いといふ譯けもあるまいから。

井泉水君に云はすれば「古池や」の句は、芭蕉の主觀が自然の奥底にまで徹した句である。言はば主觀の句である。更に井泉水君に云はすれば、「荒海や佐渡に横ふ天の河」さへも主觀

句であつて、それは單に自然を観るといふ態度から一步深く、自然を聴くといふ境地にまで進み入つた句であるといふ。

では、井泉水君が見て以て客観句と爲すものはどんな句であらうか。さういふ意味でなら、どんな句だつて主観句ならざる句はよもあるまいと思ふ。太祇の「山吹や花に葉に花に葉に花に」だつて、やつぱりさういふ意味での主観味はあるだらう。西田幾太郎氏の哲學に従へば、純客観界といふものは「自我の自我」の世界であつて、吾等が普通に客観界と見なすものは自己の創造したるもの、即ち純主観の世界である、といふ事である。

かうなつてくると、主観句が客観句で、客観句が主観句だといふやうな事にもなつてくる。主観と客観との大混亂だ。此處だ、此處だ、問題だ。

芭蕉が杜國の墓前に手向けた、

塚も助け我が泣く聲は秋の風
と、蕪村が太祇の墓に手向けた、

線香やます恵の薄二三本

とを比較して見る。單に句の姿から云へば、芭蕉の句は主観句で、蕪村の句は客観句たることに誰れも反對はすまい。しかし、此の二つの句を深く味ひ、作者の心境と句を読む者の心境とが、びつたり相觸れ合ふとき、蕪村の主観が、決して芭蕉の主観よりも淺くないことに氣づくだらう。否、むしろ蕪村の句の方が、故人を憶ふ情味がより深く感得されはしないだらうか。「泣く」と云はないところに、「云はぬは言ふにや勝る」的のものが味はれはしまいか。「維摩の默」なんかを引合ひにするまでもなく……。

子規の言葉は、此處から更に味ひ直すべきではあるまいか。

◇

二三日前に來た『人』誌の一面に、男女の二人の子供が、各々鳩を抱えながら、嬉しさうにほゝ笑んでゐる寫眞が出てゐる。嬉しい寫眞だ。じつと寫眞を眺めて居ると、獨りではゝ笑まれて來て、自分も小供の昔に返つたやうな、伸び／＼した、晴やかな氣持になつてくる。

私がまだ市ヶ谷にゐたとき、一枚の小供の繪葉書を愛好して、常に積み布團の上に飾りたてて楽しんでゐた。それは、やはり二人の幼ない小供が、さんざ遊びつかれた揚句と見えて、一人は玩具の太鼓に寄りかゝり、一人は手に桴を持つたまゝ、無心の眠りに陥ちてゐる寫眞だつた。現物は人形らしかつた。まだ裁判の最中、いろんな考へ事をして、いろ／＼と暗い氣持になつたとき、あの繪葉書をしばらく見つけてゐると、總べての問題を忘れきつて、晴れやかな氣持になり得る場合が多かつた。私は、今この寫眞を眺めながら、ふとあの繪葉書を思ひ出したのである。當所の領置で、あの二人の小供は今猶は無心の眠りに耽つてゐる筈である。健在なれ。

あの繪葉書は、市ヶ谷の教師の江澤さんも大いに氣に入つたと見えて、私の監房へ來られる毎に、あれを手にとつてつくづく眺めながら『實に好い、實に好い』と言つて居られた。又『この左の方の小兒の顔は、先日某所で拜見した木食上人のお顔にそっくりです』などとも云つてゐられたつけ。

子供の木食上人君よ、君とは市ヶ谷以來お別れになつてしまつたが、私はこんど君達のお友達で、鳩を抱えて笑つてゐる二人の子供と近づきになるやうになつたから、喜んでくれ。この二人の愛らしい子供と語り合ふとき、私はきつと眠れる君達のことを思ひ出さずには居ないだらう。

◇

本年も暮の三十日となつた。我々囚人もけふの午後かぎり本年の作業しまひである。午後から大掃除をする。頭から手拭をかむり、長柄の箒を借りて、先づ天井から拂ひ始める。きれいに見えてゐても、拂つて見るとかなり蜘蛛の巣などが溜つてゐる。火を焚くことはなくつても、いつ何處から來るものか知らぬが、煤も少々落ちてくる。一茶は、

煤掃きの世話のない身を涙かな

と詠んでゐるが、その一茶の世帯よりも更に世話のない我が家の煤掃きも、手拭を冠つて天井を掃いたりなどすると、どうやら娑婆めいた感じが出て來て『此所も浮世の年の暮』と獨り言、獨り笑ひまじりで、煤を掃き終る。

吹き來り吹き去る風に掃く煤や

◇

いよ／＼大晦日である。さて改つて年末の感じとやらでも書いて見ようと思ふが、別に改つた感想も浮ばぬ。

みそか

今日は晦日の大晦日

今年もこれで終るかなア

泣いてもみたり

笑つてもみたり

夢路で君と逢ふたのも

それも

これも

あれもみな

今年の小さな歴史だらう

今日は晦日の大晦日

今年もこれで終るかなア

こんな民謡詩が『人』誌の歳末號に出てゐる。夢路で君に逢ふたのも……なんて、まるで私の事をつくり、私の今日の感想をつくりだ。で、これを轉記して以て歳末の感としよう。

今日は教誨はなからうと思つてゐたのに、教誨があつた。所長と教務主任との話があつた。そして、所長から一場の訓話の後で、いろんな規則の改正になつた事を告げられた。その中に、刑期三年以上の者で、遠地のために親兄弟との面會の出来ぬ人々は、寫眞を撮つて送る事が出来るといふ一條があつたのを、嬉しく聞いた。私も、姫路の母があまり心配してゐるやうなら、此の壯健な姿を寫眞に撮つて貰つて送ることが出来るのである。こんどの手紙にそのことを書いてやつて姫路へ言傳て貰ひ、若し母が是非欲しいと言つたなら、それをお願いしたいものである。

夜。雪、霰、風強し。電燈消ゆ。

濱田さん。

お日にかゝると、何故だか言葉が出なくなつてしまひます。で、此處に書きます。

今日まで種々と温いお心持でお導き下さつたことは、深く御禮を申し上げますが、こんどの私に問題はどうか考へても我慢が出来ません。親鸞の教へにも、禪にも、結局私は救はれぬ事が出来ませんでした。私は、やつぱり苦しみながら、泣きながら、盲目的感情のまゝの修羅道を行います。

(日附不明)